

シニアライフプロジェクト

第2回

「自分らしく生きる」高齢者をご紹介！

これから年齢を重ねていく区民の皆さんに、高齢になったときの生活をイメージしていただくと幸いです。誰もが自分らしく生活を送ることができる環境づくりを目指した、南区南部いきいき支援センターの取り組みです。



生きがいを支え、笑顔で乗り越える

「やること（仕事）やって、食べられたら幸せ」と満面の笑みで話す。康恵さんは夫と2人暮らし。“仕事（ボランティア）”終わりに夫と待ち合わせ、二女と3人で食事に行くことを楽しみにしている。認知症について学び、理解し、少しずつ受け入れながら、本人の生きがいを支える家族を紹介する。

康恵さんは約1年半前、70歳のとき、認知症と診断された。別の疾患で長時間の立ち仕事ができなくなり、50年以上続けた仕事を引退してまもなくのことだった。介護保険の認定を受け、デイサービスを利用し始めたが、もっと本人らしくいきいきできる場所を求めてケアマネジャーが奔走。現在は2か所のデイサービスで、それぞれ月1回、二女・明希乃さん（写真下）が付き添いボランティアを行っている。

デイサービスに通い始めて以降、家事は夫・明義さん（写真上）の担当になった。それまでほとんどしていなかった料理、掃除、洗濯…。腹をくって一手に引き受けた。昔飲み歩いた経験を生かし、料理を思い出して、その味に近づけるべく奮闘した。1年経った今では「本当に美味しい」と太鼓判を押されるほどの腕前に。



ある日の夕食。スマホでレシピを検索して作った自信作。「さあ、どうぞ」と妻に声をかけた。食卓についた康恵さんは、夫が作ってくれたことをすっかり忘れて、自分が用意した料理だと勘違い。「さあ、どうぞ」と逆に夫に声をかけた。明義さんは少々がっかり。しかし、怒ることなく、笑い話に変えて話してくれた。

家事に奮闘する明義さんだが、長年患っている持病があり、定期的な受診が必要な状態。自分が倒れ入院した時のことを心配している。不安そうなたづなやきに「私がいるから大丈夫」、明希乃さんが優しく声をかけた。

明希乃さんは県内、長男と長女は県外に住んでいる。コロナウイルスの感染状況が落ち着き、自慢の長男や長女にも会えるようになった。6畳二間のリビングに孫を含め14人が集まり、食べたり飲んだり大賑わい。「みんな仲が良くて幸せ」と夫婦はそろって目を細めた。

認知症がある康恵さんを、夫と二女が支え、持病がある夫を二女が支える。そして、康恵さんの底抜けに明るい笑顔が周りの人を癒し、家族を引き寄せる。明希乃さんは“仕事”をする康恵さんの姿を見て「本当に好きなんだと思う。これからも続けられるといい」と話す。家族はこれからも康恵さんを応援し続ける。